

地域活性化という「遊び」

25

京都市
福知山市 「みわ・ダッシュ村」から

山本晋也

先 日僕の大好きな叔母が
亡くなりました。

移住前僕らが暮らしていた京都市内
で駄菓子屋を営んでいた

ごく普通のおばちゃんですが
僕は生きていく上でこのおばちゃん
から多大な影響を受けました。

誰に似たのか

子供の頃から自分がやりたいことを
見つける

後先考えず突っ走ってしまう性格で
親や親戚はもちろん
近所の人たちにまで



おばちゃんの祭壇には
駄菓子が供えてあった。

叱られてばかりだったのですが
このおばちゃんにだけは

叱られた記憶がありません。
叱るところか

どんな無茶な取り組みにも

「人間な、どんなことしとつてもそ
の人が輝いとつたらそれが一番ええ
のや」

といつも味方してくれた。

8年前40歳にもなつて突如として

「農業やってみたい」と

3人の子供を連れ福知山の限界集落

に移住を決めた時も

心配する人が多い中

このおばちゃんだけは

「しんやくんやったら大丈夫」

「人生なんか一度きりやから誰かに
遠慮する必要なんかあらへんで。人

間はもつともつと自分らしく輝いて
ええねん」

と応援してくれた。

「しんやくん あんた輝いてるか？」

これはこのおばちゃんが僕に会った
び口癖のように言っていた台詞で
僕が今でも

一番大事にしている言葉です。

質 問が「元気か？」「頑張つて
るか？」の場合

その答えがYESであれNOであれ
とりあえず即答できるのですが

「輝いてるか？」

なんて聞かれると

「はて？ 今の自分はどうかだろう。

俺って今、輝いてるのか？」

と自分の人生を深く考えずにはおれ
なくなくなります。

「輝いてるか？」と

問いかけた時に見えてくるもの

筆者プロフィール

1968年、京都生まれ。美術大学を卒業して渡米後、京都で現代美術作家として活動。そのかたわらオーガニックレストランを経営するも食材を種から作ってみたいとなり、京都市内で畑を始める。結婚して3人の子供を授かったころ、農業生産法人みわ・ダッシュ村の清水三雄と出会い、福知山市の限界集落に移住。廃屋を修繕しながら家族で自給自足を目指す。土と向き合ううち田畑と山や川、個人とコミュニティーの関係やその重要性に気がつき、田舎も都会もすべて含めた「大きな意味での自給」を強く意識するようになる。この考え方は、美術家時代にドイツの現代美術家ヨゼフボイスのすべての人々が参加して創り上げる社会彫刻という概念に影響を受けた。現在みわ・ダッシュ村副村長。

どんな職種でもそうですが
時間が経って仕事に慣れてくると
初心を忘れ、始めた頃の志や喜びが
どこかに行つてしまいがちになりま
すよね。

そんな時に突然「輝いてるか？」な
んて聞かれるとどうでしょう？
大好きなおばちゃんのこの言葉
実は子育てにも応用させてもらつて
います。

やんちゃな子供たちと
暮らしていると
親として叱らなければならぬよう
な場面に直面し

大人は毎回のようには叱るべきかどう
かの判断を強いられるわけですが
とりあえず一呼吸おいて

子供の「輝き」に注目するのです。
暴れまわってうるさかったり
いたがらして物を壊してしまつたり
ご飯も食わず一日中部屋に閉じこも
って何かをしていたり



子供がその時本当に必要としているものが何かを見つけることはとても重要です。農業で作物が何を欲しているか見極めるのが大切であるのと同じです。



砂浜ではなくモミがらプール。あまりに楽しそうだったので止められず……



17歳にもなって秘密基地とは幼稚くさいと思ったのですが、ネジや釘など使わず、蔓など自然素材のみを使っての挑戦という事です。

と大人の目から見ると単純に悪いと思える状況だけ見て判断せず「その時その子供自身が輝いているか」というところにフォーカスします。

輝 きというものは自然界に存在する色と同じように数え切れないほどのパターンがありますので元気に走り回っているだけが輝いているのではなく一日中夢中になって本を読んでいる姿もカッコイイものです。そうしてしてみると子供は自然にその子その子らしくしている時に最も輝いているし今まで叱らなければいけないと思っていた状況の中にも実は褒めなければいけない個性があったり大人も「大人らしく」というより

輝く子供のように「自分らしく」を指した方が良いというような自分たち大人が忘れかけていた大切なものを教えられることすらあります。僕らが今取り組む地域おこしもそこに住んでいる「人」がやるのですからそれらとよく似ているのではないのでしょうか？

自分たちの村は輝いているのか？自分たちの村の自分たちらしい輝きとはなんだ？

誰々みたいに、都会のようにと現代に溢れる情報に惑わされてしまおうと自分まで見失って輝きを増すどころかどんどん消費してしまいます。

お ばちゃんは小さな町のただの駄菓子屋でしたがとても輝いていました。亡くなった日久しぶりに娘さんと出かけた百貨店で昼食を済ませた後「たまにはお店休んでゆっくりしたら？」と引き留められるも「小学生が毎日買いに来るの楽しみにしてるから、帰って店開けるわ」と小学生との約束を守るためニコニコいつもの時間に帰って行ったそうです。

「あなたは輝いていますか？」